

今回は、杏雲堂病院創始者の佐々木東洋(1839-1918)が、長崎留学までしてオランダ医学を学んだ話を紹介します。

東洋は 14 歳の頃から、漢方医であった父の見習いとして江戸本所で医療を行っていましたが、どうしても西洋医学を学びたく、当時日本で最も普及していたオランダ医学（蘭学）学習のために家計の苦しい中を、父の好意で 1956 年佐倉順天堂（現在の千葉県佐倉市）に入学しました。佐倉順天堂とは、佐藤泰然(1804-1872)が 1838 年江戸薬研堀に開設した蘭学塾を佐倉に移動したもので、現在の順天堂医院の始まりです。東洋の日記「東洋手記」には、塾でのオランダ語学習が非常に困難であったことが記されており、一時体調を崩し家に戻ったほどでした。その後再入学したところ、丁度佐藤泰然の養子の佐藤尚中(1827-1882)が、オランダ医学を学ぶために 5 人の門下生を連れて長崎に旅立つときでしたので、東洋は熱心に頼み込み同行を許され一同は 1860 年 12 月に長崎に到着しました。

長崎では来日後 4 年になるオランダ人医師ポンペ(1829-1908)が、松本良順（1832-1907、佐藤泰然の次男、明治維新後の軍医総監）を塾頭とする全国から集まった多くの学生にオランダ医学を教授していました。ポンペの講義には通訳が付かず、しかもこれまで聞いていた日本人のオランダ語発音は全く参考にならず、一講義の間に一語しか理解できなかったこともあったそうです。しかし、ポンペは幕府から死体解剖の許可を得ていましたので、解剖は十分に学ぶことが出来ました。人間の他に牛を解剖することもあり、ある時脳を解剖し余りの肉の部分を料理屋に持ち込んで食べて美味だったと日記に記されています。

その後不幸にも東洋は泥棒に所持金を全て盗まれ、生活費を得るために辞書を買ったり、洋書を書き写す仕事などをしなくてはなりませんでした。その上、長崎養生所（後の長崎医大）の建設が遅れ、患者の診察も出来ない有様でしたので、東洋は帰ることにしました。江戸に着いたのは 1861 年の年末ですから、長崎留学はほんの一年足らずで、しかも学習面でも経済面でも苦労ばかりでした。しかしオランダ語学習の経験を生かして、その後さらにドイツ語、英語を独力で学び、多くの医学書を翻訳出版しました。特に、当時国民病とも言われていた脚気の治療に関して、漢方医学と西洋医学の成績を比べることになったとき、東洋は西洋医学の担当者となっています。世間では大きな関心事となり、これを「脚気相撲」と名付けました。結果は、明らかに西洋医学が優っていることを示し、東洋の名は一段と有名になったとのことです。

江戸に帰ってからも佐藤尚中との交流は続きました。順天堂医院は、1875 年 4 月に下谷練堀町から現在の本郷湯島の広大な土地に移転しましたが、佐藤尚中は過労のためか重症の肺炎となり数ヶ月治療、静養をせざるを得ませんでした。その間は佐々木東洋が院長業務を代行しました。1882 年には肺結核が進み佐藤尚中は「佐々木東洋に一切の治療を任せる」と頼んだと、先日の創立記念日講演会での酒井シヅ先生（順天堂大学医学部医史学）の講演でお聞きしました。佐藤尚中は 7 月 23 日に 55 歳で亡くなりました。東洋は杏雲堂醫院が 6 月 1 日に開院してからまだ間もない頃で多忙であったにも関わらず、先輩でありかつての恩人であった先生の治療に懸命だったことでしょう。順天堂医院と杏雲堂醫院の古い繋がりを感じさせる逸話の一つです。佐藤尚中は没後、谷中墓地に埋葬され、さらに大きな顕彰碑が門下生、関係者など 386

名の寄付により建てられました。東洋は、その際幹事の一人として関わっています。

最後に、日記にあった当時の長崎往復の経路を紹介します。片道 40 日ほどかかっています。

往路：東海道を下り伊勢神宮参拝後、京都に出て淀川を大阪に下る。ここから船で瀬戸内海を経て馬関（下関）へ着き小舟に乗り換え九州に上陸、その後は陸路をとり長崎に到着。

復路：「九州黒崎（福岡県北九州市若松区黒崎）より乗船し、風災を四国多度津港（香川県多度津町）に避け、夜を冒して讃州金比羅宮（香川県仲多度郡琴平町）に参詣し、大坂を経て東海道により、文久元年十二月下浣（下旬）帰宅せり」（原文）。

すこやか通信（平成 24 年 6 月号掲載記事に加筆訂正）